

1941-10-20

ロシア語のわかる抜け目のないのが二人いたのだが、いつも連中ばかり斥候に出すわけにはいきませんでした。結局、一分隊全体を偵察にまわして、しかも、かなりめんどうな敵との遭遇戦が起きた場合、彼らを掩護するために、その後ろから、私が装甲車を突っ走らせなければならぬのが普通になってしまいました」

前に強調したように、シュトロープは自然に対してたいへん敏感だった。その地方の風景の美しさや深い森やもみの木林や数知れない湖の話をした。ある時など、すっかり熱が入って、夢みる風情で、イルメン湖の落日の様子を生き生きと手にとるように描き出したものである。

こうした話を総合してみると、彼の前線勤務はたいして苦しいものでも骨の折れるものでもなかったようだ。彼は森の中の任務についていた。従って酷寒を免れることができた。無情なロシアの冬に道を失った幾百万の国防軍兵士の悲劇を味わっていない。つらい前線の時期、のことを何度も大げさに回想するのに頭にくて、かなり無遠慮にこう言ったことがあった。

「あなたの前線は、ドイツ人の多くの戦争体験に比べた天国みたいなものですよ。シュトロープさん、くだら

カ月と一週間だった——しかも、鉄橋近くの「前哨地点」にいたのはそのうちの丸一カ月にすぎない。そのあとシュトロープは、親衛隊「アードルフ・ヒトラー」護衛連隊の予備大隊に移された。この大隊の中では、事実上、彼は何もしていない。腰掛けに過ぎなかった。しかし、彼が、のちになって、ヒトラーの護衛隊の戦士として、「第三帝国の偉業とドイツ民族の将来」のために東部で戦ったと自慢できる（またそれを役立てることができ）ような履歴書類への、かの配分を必要としていたのである。

「親衛隊アードルフ・ヒトラー」護衛連隊の大隊には長くいたのですか」

「一カ月ちょっとです。一九四二年十月二十日には（この日付は一生忘れません）、ハインリヒ・ヒムラーが私に託した特別任務に備えるために、親衛隊帝国指導者参謀本部に召還されたからです」

シュトロープの声にこもった誇らしげな調子とヒムラーが彼に課したという任務に（実は）興味をそそられて私は尋ねた。

「ヒムラーはきつと、あなたに、戦争に勝ったあとの親衛隊兼警察の凱旋パレードを指揮する準備をさせたかっ

ん作り話はよしましう。あなたもまた経歴の中に、第二次大戦で最前線の兵士だったという証明を持つ必要があったから、親衛隊の友人たちの手で、三カ月間の夏期実習に派遣されたのでしう。当時はどちらかというところ戦闘にはあたっていない。『髑髏』『師団の部隊へね。あなたが前線と呼べる前哨部隊にいたのは事実上一カ月だ。例の鉄橋のそばの小さな村にね。中程度の規模の戦闘行為すら少なかった。ロシア北西部の深い森の中の橋の番と、総督府にある同じような橋の監視とどころが違うでしょう。あなたのお話だと附近の住民の数は、ポーランド国内の、同じような橋梁の監視所に隣接する地域の人口より十数分の一の少なさだった。つまり、バルチザンの危険も少なかったわけだ」

「私は、第二次世界大戦中は、東部戦線では戦いませんでしたが」とシールケが口をはさんだ。「しかし、將軍殿のお話だと、一九四一年のあのうだるような七月と八月に、そこが地獄でなかったことは確かです。バルチザンも噛みついたでしょうが、たぶん、蚊の方がずっとひどかったでしょうね」

シュトロープが親衛隊「髑髏」隊に服役していたのは一九四一年七月七日から九月十五日まで、つまり二

たのでしうね」

自分の思い出に我を忘れていたシュトロープは私の皮肉に気づかず、すぐに質問に答えた。

「最近まで、私は親衛隊帝国指導者の特別依頼の内容を絶対言わないでしたが、もう話してもかまいません。ほかならぬ一九四一年十月に、私はカフカスの親衛隊兼警察指導者の職務につく準備を、極秘裡に進めるようにとの連絡を受けたのです」

「しかし、あなたがたの軍隊はその当時、カフカスの近くにはいなかったではないですか」

「モチャルスキさん。ポーランドは今、計画化の原則を基礎にした国だ。われわれアードルフ・ヒトラーのドイツ人も、国家生活と党生活の多くの領域で同じ方法を採用したのです。だからこそ、私にカフカスの親衛隊指導者になってほしいと思っ……」

「カフカスの侯爵にでしう」と私は、笑いながら横やりを入れた。

「今日のあなたは、冗談がお好きですな、モチャルスキさん」シュトロープの目には上機嫌のきらめきがあった

——この日の彼は、横柄でもあれば誇り高くもあり、また、かなりやさしくもあったからだ。「カフカスに新秩

コカサス

294243-1020
中絶

1941-7-28

序をもたらそうとしていた以上、グルジア族やアゼルバイジャン族、アルメニア族があまり無政府主義的な行動をとらず、しっかりと働くように、そこで指揮をとり、強力な権力を握る者が誰かいないてはなりません。戦争勝利後の第一段階では、こういう権力を持ってるのはティフリリス（現在のトビリシ）を本拠とする親衛隊兼警察指導者だけでした」

「この職務につくために、私は、ベルリン本部で必要な訓練を受けなければなりませんでした」シュトロープは先を続けた。「そこで親衛隊兼警察指導者のための特別講習会を修了し、秩序警察の本部と保安警察の本部で彼らの仕事のやり方、組織、事務体系の知識を身につけるために、短期の実習を行いました。さらに帝国の東のすべての国の在外ドイツ人に対する政策の基本を教わりました。しかしこれは、そう簡単な問題ではありません。論文や方針をたくさん読み、専門家が開いた十数回の説明会に出席しなければなりませんでした」

*

「前線ではソ連軍の捕虜に会いましたか」と私はある時、彼に尋ねた。

「ドイツ軍には女性将校がいなかったため、われわれは、このロシア女性たちの将校の階級も認めなかったのです」

「道徳水準、清潔感覚、知性という点では、彼女らにどんな評点をつけますか」と私は訊いてみる。

「それが、実はよい女性たちでした。身なりは質素だが、器用で、落ちつきがありました。ロシア語をあまり知らなかったのですが、初めのうち彼女たちと仲々話ができなかったのですが、驚いたことに、なかの二人はドイツ語を話し、フランス語も少し話したのです。大学の学生だったのじゃないかと思えますね」

「長くあなたがたの部屋の掃除をやっていたのですか」「三週間後にはもう来ませんでした。ある日、森に出陣して帰ってみると、よそに送られたと言うことでした」

「おそらく、あなたの部下が彼女たちを殺して、死体はどこか近くに埋めたのでしょね。二十五キロほど西にある基地との連絡にひどく苦勞したあなた自身おっしゃったじゃありませんか。報告を携えた急使を数台の装甲車の護衛をつけて送っていたとすると、同じ道を通って捕虜部隊を移送することなど、とてもできなかったでしょう」

「ええ。調遣師団の一部隊が少人数のソビエト兵グループを捕虜にしたことがありました。私は、司令部に連れてこられたばかりの連中をじっくり観察しましたが、屈強な、陽焼けた、スポーツで鍛えられた、落ちつきのある人たちでした。もちろん、われわれが調べたのはソビエト将校だけでしたが、なかに小尉の階級の女性が三人いました。あとで情報将校が話してくれたところでは、この将校たちは具体的な情報や重要な情報は一切明かさなかつたそうです。この三人の女性はあとで、われわれの兵營の世話にまわされましたよ」

「將軍殿はいつも女には目がありませんか」とシールケが、善良そうに、そしてまた、意地悪く笑って言った。「人種的不名誉にはいたらなかつたでしょうね」

「シールケさん、親衛隊将校及び親衛隊員は誰ひとり、スラヴ女性と性関係をもつことによって自らを辱めたりしない、あなたは知っているではないかね。そんなことは論外だ。女たちは兵營の掃除をしたり、湯を沸かしたり、食事の用意をしたりしていたのです」

「つまり、あなたがたは敵の将校に——彼女たちは少尉だったのですから——使用人の仕事を押しつけたわけですな」私は厳しい口調で言った。

シュトロープは黙っていた。一方私は、三週間の親衛隊将校宿舎の床磨きのあと、イルメン湖畔の美しい森の中で、おそらくシュマイサーで銃殺されたであろう少尉の娘たちの運命を思っていた。あるいはシュトロープも同じことを考えていたのかも知れない。

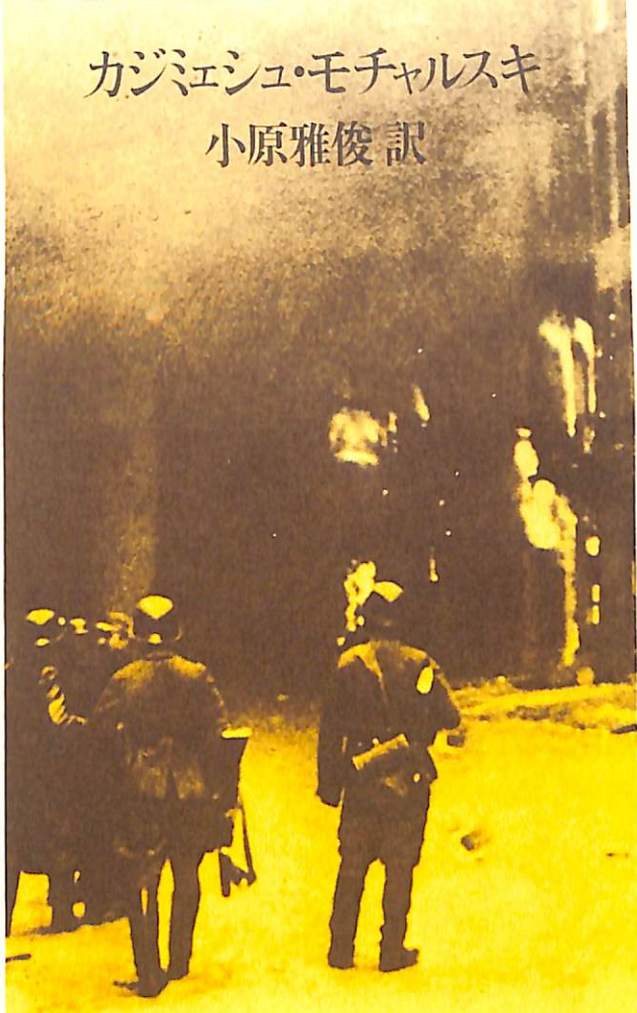
*

ある日のこと、シュトロープは東部戦線での服務の話を再び持ち出した。彼は、親衛隊師団の編成とその戦闘・輸送・工兵の装備、弾薬、無線装置、食糧等の補給について話した。彼の回想から、師団は異例の特権を与えられていたことがわかる。そこには、ないものは何もなかった。ベルリン本部との特別連絡飛行機さえ持っていた。宿営も戦争用には豪華なものだった。工兵部隊と土工部隊が無数の防御設備——主に木と土とでできた設備を建設していた。ドイツ軍は安全を考えて、鉄道と道路の幹線沿いの森を百メートル幅に帯状に伐採した。良質の木材が大量にあったから、それを塹壕の建設や冬場の暖房に利用した。機関銃と軽砲の砲架を備えたコンクリート掩蔽壕は、ところどころに配備されただけであった。

死刑執行人との対話

カジエシュ・モチャルスキ

小原雅俊 訳



R O Z M O W Y
Z
K A T E M